研究

地元から見る沼城の戦い

付――或る「元就の沼城攻略」観について――

本会会員
都濃郷土史会員　廣林友三

はじめに

平成九年は、ＮＨＫ大河ドラマ「毛利元就」の放映により地元須々万にあっては元就ブームに湧いた一年であった。私の属する都濃郷土史会においても、三月早々、徳山市及び徳山郷土史会の協力を得て『沼城の戦いマップ』（四〇〇〇部）の発行、続いて歴史講演会の開催や史跡碑を建立してきた。そして、一一月には、地区のイベント「沼城まつり」にも間に合わせるように、須々万地区まちづくり協議会の協力を得て、『須々万地区史跡案内図』の大看板を、史跡の一望できる地点に設置した。

一方地道な研究も各方面で進められ、地元の人々の戦いの歴史的解釈や、勝者・敗者の見方も徐々に変わってきたように思われる。私も、毛利氏の防長侵攻において、

なぜ、須々万が大内・陶方の最大の防衛の拠点となったのだろう。

なぜ、沼城方は、斯く戦ったのだろう。

このあたりに視点をあてて考えてみることにした。

一、防衛の拠点としての須々万

沼城の戦いといえば、「沼城は、三方を沼に囲まれ難攻不落の要塞であった。ここに、大内・陶方の武将や地侍・農民が結集し、毛利軍の防長侵攻に備えた。

そして、攻撃に耐えること一年六ケ月（閏月を含む）遂に、毛利軍の網竹や薦を投げ入れての渡沼作戦による総攻撃により、弘治三年（一五五七）三月三日、落城した」と言われている。

しかし、果たして天然の要塞であるということのみで、ここ須々万の地に、陶方の兵力が結集したのであろうか。交通・経済の面から考えてみることにする。

(1) 交通面より見た須々万

須々万は、古代より周防北道の要衝といわれており、周東町長野から須々万を通り、徳地町を経て山口に連絡する道となっていたことが記録に見える。つまり、現在の国道三七六号に当る。

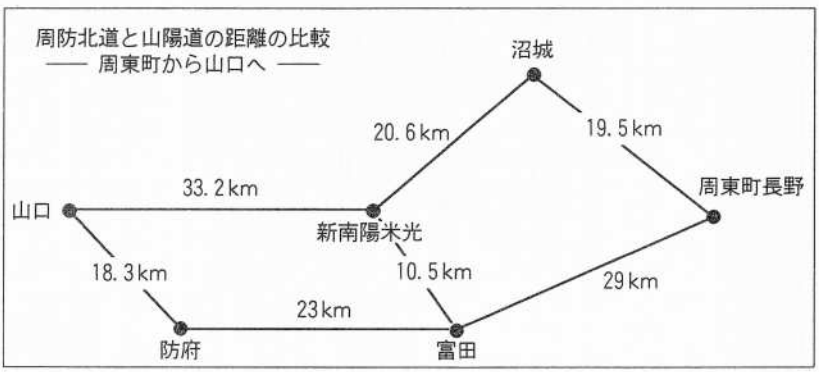
しかし、このことは、現代人から見れば実感が伴わず納得のゆかない処がある。

そこで、周東町長野を起点に、周防北道を経て山口に至る距離と山陽道を経て山口に至る距離を計測実証することにした。勿論、両道とも中世の古道を純粋に辿ることは不可能であり、現在で可能な範囲での計測とすることにした。その結果は、次の通りである。

この測定結果から周防北道と山陽道との間には三キロ程度の差しかないことが分かった。また、山陽道も当時は現在のように平坦な道ではなかったことも調査により分かってきた。

このことから、徒歩で旅をする当時を考えると、周防北道も山陽道に劣らず重要な交通路であったことが容易に察せられる。

従って、毛利軍の主な侵攻ルートは、周東町長野から桧余地を通



り、熊毛町八代須野河内　徳山市中須朴　下松市米川白砂を経る須々万への道であったものと思われる。

(2)　穀倉地帯としての須々万

須々万地区は、昭和四〇年代後半頃より開発が進み現在では須々万盆地の広々とした田園は、多く商業地や宅地と化している。

しかし、昭和四八年、徳山市地区別米の生産量を見れば、一五の地区の中では第一の生産量となっている。それは、『和名類聚抄』による「都濃郷」の昔から開けた村であって、藩政時代には「鹿野は八〇〇〇石・須々万は五〇〇〇石」と言われていた歴史にも由来している。

従って、それ以前の陶氏二〇〇年の領有下にあっても重要な給領地であったと考えられる。しかし、残念なことに当時の生産量を示す史料が見つからず、元和三年（一六一七）の史料をもとに考えて見ることとした。

元和三年と言えば、初代徳山藩主毛利就隆が下松に入った年（徳山入府は、慶安三年〈一六五〇〉）であり、沼城落城六〇年後の史料である。

この史料から須々万村の石高を見るに、周南地域で

村別石高

村名(＊～現徳山市)	石　高（元和3年）
富田下上村	5，339石
末武村	4，895石
＊須万村	3，587石
＊須々万村	3，058石
＊野上村	3，027石
＊中須村	2，577石
＊久米村	2，357石
＊矢地村	2，324石
河内村	2，292石
豊井村	2，187石
＊四熊屋村	1，648石
生野田村	1，124石
山峯村	1，022石
金山理村	1，016石
切道村	939石
大川村	742石
福向村	703石
大瀬戸村	657石
下谷村	520石
戸田村	422石
温見村	391石
串櫛浜（浜地谷）村	343石
＊苅大藤村	317石
＊譲羽村	272石
＊相島村	241石
＊栗屋村	218石
＊川曲村	151石
＊遠石村	143石
	139石
	129石

は、陶氏の城下である富田下上が一番高く、次が末武村・須万村と続き、須々万村は四位となっている。この中で、耕地の少ない須万村の石盛りが異常に高いのは、楮石（こうぞこく）が畠に付随して二重の石盛り（過酷な取り立て）となるからであり、米の生産高から言えば末武村に継ぐ石高であり、陶氏にとっては有力な地盤であっ

たことが考えられる。

また、耕地面積は、慶長一五年（一六一〇）の検地帳によれば三六八町歩であり、荒廃や一方では開発の進んだ現在の耕地（平成八年度、一六〇町歩）より遥かに広い耕地であることも分かった。

しかし、弘治の昔、沼であったと想定される田園地域には、現在も相変わらず立派な田園が広がっている。

このことから、沼であった地域は、当時の開発状況から考えて、須々万川沿いから沼城を囲む限られた地域であって、ここが人の踏み入ることの出来ない深い泥土があったと想定される。また、点在する石碑の位置関係やボーリングによる地質調査から見ても盆地の広い地域とは考えられない。

(3) 飛龍八幡宮と須々万

弘治の戦いより四四〇余年、当時を偲ぶ縁はほとんどなくなっているが、当時の民衆の心の拠の中心であった八幡宮について考えてみたい。

須々万地区の氏神飛龍八幡宮は、南北朝時代の康暦（北朝）二年（一三八〇）大内氏の許可を得て創建されたと記録に見える。

神社創建については、『八幡宮由緒書』の内容はともかくとして、当時の領主である陶氏が大きく係わっていることが考えられ、また、この時代ともなると農業生産の増大による農民の生活向上が、神社創建に大きく係わっていることも考えられる。

そこで、現在の飛龍八幡宮を見ると、周南三市一町（旧都濃郡全域）の中で遠石八幡宮や花岡八幡宮とあまり劣らぬ社格が感じられる。因みに、明治四年に制定された社格制度（現在は有名無実）による県社昇格年を見ればいっそうそれが明らかである。

遠石八幡	明治六年	降松神社	昭和三年
＊祐綏神社	大正四年	山崎八幡	昭和五年
花岡八幡	大正一二年	＊児玉神社	昭和八年
飛龍八幡	大正一三年		

＊印は、祭神が徳山毛利氏祖霊並びに児玉源太郎であり、他の五社とは歴史的政治的に異なる。

このことは、当時（中世・近世）の農耕社会におけ

る須々万の経済的地位を示すものであり、陶氏にとっても重要な拠点であったことが裏付けられる。

飛龍八幡宮全景

二、主従関係と陶氏

戦国時代においては、「武士は二君にまみえず」などという儒教道徳は確立しておらず、主君が主君たるに足る器量をもたなければ、その君主のもとから離脱するのも自由であり、主君に対して弓を引き、立場をとってかえるのも非難の対象とはならなかった時代であった。

天文二〇年（一五五一）陶晴賢が大内義隆を攻めたのもこうした観念の風潮の現れでもあろう。そして、厳島において陶晴賢が敗れてからは、目敏く時の流れを読みとった小豪族や大内氏の旧臣たちが、ぞくぞくと毛利氏に帰順している。到底、近世にあっては考えられないことである。

しかし、こうした中にあって、沼城に集結した将卒（家臣）や農民は違っていた。戦況の大勢は目に見えているものの徹底抗戦の構えをとり、度々の毛利軍の攻撃にも長期間よく耐えきた。そして、弘治三年三月三日、城将山崎興盛父子は元就の帰順要請を断り自刃

し、城は毛利軍の手に帰した。

このことは、山崎興盛が主への恩義・主との契約を貫き通したことであり、また、彼が須々万の代官として地侍や農民の絶大な支持を得て、共に郷土を守ろうとしたものであると考えられる。

さて、陶氏（興房・隆房〈晴賢〉）が多くの家臣たちといかに固い主従関係で結ばれていたかは、偏諱の授受や陶氏に殉じた最期の状況からもうかがい知ることができる。左の一覧は、これを示すいくつかの例である。

（右の線を付した字（名前）が、陶氏の偏諱を受けたものである）

宮川房長　折敷畑山の戦いで戦死　山崎興盛　沼城の戦いで自刃

江良房栄　毛利元就による謀殺　山崎隆次　沼城の戦いで自刃

三浦房清　厳島の戦いで戦死　江良賢宣　毛利氏に帰順

伊香賀房明　厳島の戦いで自刃　野上房忠　長福院で自刃

勝家興久　沼城の戦いで戦死

従って、当時の状況からして陶晴賢を単に逆臣とだけで片付けることには大いに問題があり、この逆臣説をつくり上げたのは　徳川光圀以来の『大日本史』に代表される尊王思想であり、更にそれを増幅させたのは明治以降の国家体制であった。

今回の大河ドラマ『毛利元就』では、こうした陶晴賢の評価は見直され、「勇敢にして、思いやりのある人物」として描かれ、実証的な正しい評価がなされてきているように思われる。

陶氏の或る末裔の方の申されるには、「女学校時代、歴史の授業が嫌で嫌でたまらなかった」「今は、楽しく『毛利元就』を見ている」とのことであった。

おわりに

以上、毛利軍の防長侵攻において、須々万が、なぜ防衛上の拠点となったか、主従関係は、どのようであったかを考察して見た。その結果、「周囲を沼に囲まれた難攻不落の沼城」に関することだけでなく、次の事象を実証することができた。

① 須々万は、周防北道の要衝であったことが実測により確かめられた。

② 須々万は、陶氏の重要な給領地の一地域であったことが、史料により確かめられた。

③ 須々万飛龍八幡宮を他の神社と比べることにより、当時の須々万の経済的地位がうかがわれた。

④ 陶氏と家臣（土豪）、家臣と地侍・農民との主従関係が強かった。特に山崎興盛に代表される。

⑤ 研究の過程から、陶晴賢を改めて考え直し、見直すことができるようになった。

最後に、あれ程に湧いた元就ブームもドラマの舞台では、「あの抵抗一年六か月の須々万」を素通りしてしまっている。これも主（陶晴賢）亡き後の戦いそのものの性格からしてやむを得ないものでもあろう。

付――諸説を探る――

(1) 「わずか四日間での落城」について

NHK『元就紀行』において、「弘治三年二月二九日より、わずか四日間の攻撃で落城させた」と放映されていた。なるほど、その通りではある。

しかし、なぜ弘治三年二月末からの毛利全軍の総攻撃のみを強調されたのだろう。特に「わずか」という言葉が気になる。あれでは、

なぜ、あのように陶氏残存勢力が結集したのか。

なぜ、一年数か月もの抵抗を続けたのか。

その史的意義が薄れてきたように思えてならない。

あの「わずか」という言葉に、調略・戦略にたけた「毛利元就」ということだけを印象づけさせることとなったのではなかろうか。

(2) 「飛龍八幡宮への寄進状」について

弘治三年四月二二日付で、元就・隆元父子は須々万飛龍八幡宮に五貫文の地領の寄進をしている。

これが、八幡宮への論功行賞だとの説である。

寄進状の日付からすれば、論功行賞と考えられたのも一応分からないこともない。また、あの調略家元就のこと、当然八幡宮（宮司）にも調略をしかけてきたことであろう。

しかし、あの寄進状を論功行賞だと、単純に受け

止めるのはどうであろう。そうだとすれば、八幡宮（宮司）は、毛利氏を相手に強く抵抗した地元の多くの民衆への背信行為となるのではないだろうか。

そうではなく、征服地を統治する上で一番大切なことは民衆の収攬であり、そのために民衆の心の拠である八幡宮に地領を寄進をしたものだと考えるべきではないだろうか。このことは、ほとんど全ての戦国大名が神社への寄進や造営をおこなっている事実を見ても明らかである。

(3)「鉄砲の使用のこと」について

或る史家が、元就が沼城の戦いにおいて始めて鉄砲を使用したと放送された。早速問い合わせて見たところ、やはり証文は、浦家四郎兵衛家の「今程なまり所持之由候間、給候者可為祝着候、鉄放之ために候間、須々磨せめの御合力たるへく候、かしく」の文書だけであった。

この鉄砲使用について、『新裁軍記』は「参考」として載せているものの確証がなく「本文」には載せておらず。また、『毛利元就卿傳』は、諸軍記に全然その記述がないとの理由で疑問視している。

従って、あの浦家文書を更に裏づけるような史料のない限りにおいて、無理やり二義的史料により、沼城の戦いに鉄砲使用をこじつけることには疑問を持つものである。

参考文献

徳山市史　上下巻　徳山市史編纂委員会編
下松市史　下松市史編纂委員会編
新南陽市史　新南陽市史編纂委員会編
鹿野町誌　鹿野町誌編纂委員会編
地質調査資料　大東建設コンサルタント
新裁軍記　田村哲夫校訂　マツノ書店
毛利元就卿傳　三卿伝編纂所編　マツノ書店
陰徳記　上　米原正義校訂　マツノ書店
防長寺社由来　第二巻　山口県文書館編
萩藩閥閲録　第三巻　山口県文書館編